上司小剣「森の家」と大正期の「婦人公論」
――信州大学所蔵石井鶴三関連資料から――

荒井真理亜（相愛大学人文学部）

一

石井鶴三が「新聞連載の小説に毎日挿画を描いたのは」、上司小剣の「花道」が最初であった。[1]「花道」は、大正九年四月五日から同年九月十一日まで「時事新報」の夕刊に計一六〇回連載された。石井鶴三の挿絵は計一五七点に及ぶ。[2]また大正十年二月三十日（ママ）[3]に玄文社より刊行された単行本『花道』の挿絵と装幀も石井鶴三が担当した。装幀の図が四点、挿絵は三十点ある。[4]新聞連載時の挿絵も、単行本の挿絵と装幀も、石井鶴三に依頼したのは上司小剣であった。

石井鶴三はこれより前、すなわち「「婦人公論」に上司氏の『森の中の家』という小説が載った時、主筆の嶋中雄作氏のなかだちで挿画をかいた」。[5]ただし、小説の題は「森の中の家」ではなく、「森の家」である。「森の家」の挿絵画家として石井鶴三を推薦したのは、「婦人公論」の主幹の嶋中雄作であった。「森の家」は、「婦人公論」に大正八年六月一日（第4巻6号）から翌九年三月一日（第5巻3号）まで、計十五回連載された。石井鶴三の挿絵は、大正八年六月一日（第4巻6号）から同年十一月一日発行（第4巻11号）まで毎回一枚ずつ掲載されており、計六点ある。

上司小剣は「はじめ挿画というものにあまり関心をもっていられなかった」が、石井鶴三の挿絵によって「連載小説に挿画の占める位置の重要であることを知った」。[6]上司小剣は、石井鶴三の「芸術的良心と、息づまるやうな努力とに打たれて私の作品までが向上したやうな気がした」という。[7]石井鶴三との出会いが上司小剣の挿絵に対する認識を変えたのである。そして、石井鶴三は「その時の縁で上司氏に知られ愛されて、氏の小説に挿画をたのまれることになった」。[8]

以上の経緯については、拙稿「上司小剣「森の家」「花道」の挿絵と装幀に関して―石井鶴三宛上司小剣書簡から―」（「信州大学附属図書館研究」第1号、平成24年3月31日）と「上司小剣『東京』〈愛欲篇〉の新聞連載の事情―信州大学所蔵石井鶴三関連資料から―」（「信州大学附属図書館研究」第2号、平成25年1月31日）で言及している。さらに拙稿では、上司小剣の「森の家」と「花道」の挿絵と装幀に関する書簡十六通（石井鶴三宛上司小剣書簡11通、嶋中雄作宛上司小剣書簡1通、上司小剣宛三井玉輝書簡3通、石井鶴三宛玄文社書簡1通）を紹介しながら、小説家と画家の関係とその協働作業の様子を明らかにした。その後の調査で信州大学所蔵石井鶴三関連資料から上司小剣の「森の家」に関する書簡が新たに一通発見された。よって本稿でその一通を紹介し、「森の家」の挿絵が最後まで掲載されなかった事情と大正期の「婦人公論」における絵の役割を考察する。

二

上司小剣は「挿絵画家は作家の女房」（「読売新聞」大正10年3月13日）の中で、次のように語っている。

一番初めに「婦人公論」に絵入の続き物を書いた時、同社から石井鶴三氏に挿画を頼んでくれて、唯原稿を見て絵を描くのだとばかり思つてゐたら、石井氏から会見を望まれて、作中に出る人物の性格だとか、作の奥にある思想、それから背景に用ひられる土地といふやうなことを詳しく聞かれ、その上石井氏は背景の場所を実地に見に行つた上、絵を描かれたので作者にとつては非常に満足な絵が出来た。

「森の家」の連載開始前に、石井鶴三の希望で打ち合わせの機会が設けられた。[9]「森の家」の登場人物の性格や作品の舞台、小説の主題について上司小剣が説明したのである。では、「森の家」の構想はどのようなものだったのだろうか。

上司小剣の「森の家」の連載が開始される前月号、すなわち大正八年五月一日発行の「婦人公論」（第4年5号）には、次のような「次号長篇小説予告」が掲載されている。

征矢子が死んで、田山花袋氏の「白い鳥」は今月で終わりました。〈中略〉

その後を承（う）けて次号からお目にかゝるのは、短篇小説で已に々々お馴染の、例の軽いきび〳〵した筆で、チヨイ〳〵皮肉やユーモアを交ぜて、日常茶飯の間に人生の機微を捉へるに妙を得た

上司小剣氏の新大作　森の家　上司小剣作

であります。

上司小剣は「森の家」以前に、「赤い帯」（第1年4号、大正5年4月1日）をはじめ、八篇の短篇小説と一篇の情話を「婦人公論」に発表している。[10]これらには、冒頭の頁に小説の内容とは直接関係のないカットが入っていることはあるが、小説の内容に即した挿絵はない。上司小剣が「婦人公論」に発表した小説に挿絵が入るのは「森の家」が初めてであった。

先の「次号長篇小説予告」には、続けて次のようにある。

「森の家」はそも何を語るでせう。冗々（くどく）しい前口上は止しにして、作者の手帳から左の一節を抜出して御覧に入れます。

東京郊外の森の中に、藁葺の一軒家があつた。それを借りて住んだ描かざる画家で詩を作ることの好きな男は、若い妻と二人の子とを連れて、平和な月日を送つてゐた。其のうちに或る人の世話で雇つた下女は無断で家出して来たものであつたから、夫婦はそれを隠匿（かくま）ふやうな形になつて、いろ〳〵と苦労をする。妊娠中の細君はヒステリーになる。男はもう詩を作れないと言つて怒る。犬が毎日吠え立てゝ、森の中の家は平和でなくなつた……。

「森の家」の主人公は、花澤春太郎という画家である。春太郎には早苗という妻と二人の子どもがいる。春太郎は美術学校の日本画科

を卒業してから六年経つが、絵を描くことはなく、詩作に耽っている。一家は東京郊外の森の家に移り住む。しかし、森の家での生活は電灯を壊されたり、泥棒に入られたりとトラブル続きである。特に夜が寂しく、女中が怖がって居つかない。祭りの日、春太郎は新参のお梅という女中に誘惑される。お梅から恋人への手紙の代筆を頼まれるが、結局、春太郎は書かなかった。翌日、お梅は出奔し、後日、死体となって発見される。服毒自殺らしい。検死をした医者からお梅が妊娠していたと聞く。以来、春太郎はお梅の亡霊に苦しめられる。息子の常夏が入院し、そこでお梅によく似た北尾という看護師と出会う。春太郎は北尾に惹かれ、二人は結ばれる。しかし、北尾は病院を解雇されて、郷里に帰ってしまう。妻が第三子を出産しても春太郎は喜べず、北尾を恋しがっていたところへ、北尾の母親が訪ねてきて、北尾が春太郎の子を宿していることを告げる。春太郎は森の家もこれで見納めだろうと思いながら、家を飛び出す。以上が「森の家」のあらすじである。

先の「次号長篇小説予告」で紹介されていた構想には、「或る人の世話で雇つた下女は無断で家出して来たものであつたから、夫婦はそれを隠匿ふやうな形になつて、いろ〳〵と苦労をする」とある。確かに「森の家」には継母の虐待に堪えかねて「無断で家出して来た」お鹿という女中が登場する。しかし、継母や父親がお鹿を探しに来るようなことはない。最後もお梅の亡霊に脅かされてお鹿は自分の意思で実家に帰る。つまり、夫婦が「それを隠匿(かくま)ふやうな形」にはなっていない。「森の家」は構想の通りにはならなかったということであろう。(11)

「森の家」の夫婦の「苦労」は、お鹿によってもたらされるわけではない。森の家での不便で不安な生活と、夫婦の気持ちのすれ違いによる。妻の早苗が夫への不満を募らせるのは、弟の不祥事に思い悩む早苗の心中を春太郎が察してくれず、冷たく突き放したからである。そのような夫を「冷酷」だ、「気楽」だと言って「夫の内面生活の一部をも理解し得ない」妻に、春太郎は「腸を掻きむしらるゝやうな」思いを持つ。

春太郎が早苗に求めるものは「唯一つ自分の生活と芸術とに対する了解である」。確かに早苗は「最愛の夫に早く見事な絵を描かして、世の中を驚かしたい」「自分も若い大家の妻として肩身を広くしたい」と、春太郎の画家としての成功を夢見ている。だから、夫が絵を描かないことを寂しく感じているが、そのことで春太郎を責めたりはしない。しかし、春太郎は次のように考える。

> 良妻賢母といふ時代おくれの学校の講堂に据ゑてある偶像も、この唯一の了解の上に立つならば、今の春太郎に取つては、さまでの邪魔にもならぬ。しかしこの唯一つの大切なものが欠けてゐては、春太郎に取つては仕様がないのである。

「良妻賢母」を「時代おくれ」だとし、妻に夫の「内面生活」への理解を求めるところに、春太郎の女性観が窺える。それゆえ、春太郎は「ハウプトマンの寂しき人々」を知っていて「描かざる画家」に理解を示す北尾に惹かれるのである。

しかし、北尾に春太郎の「生活と芸術とに対する了解」がどのくらいあるのかというと、具体的なやりとりは描かれていないので、わからない。ただ、春太郎と北尾が築地から舟に乗る時、春太郎は「広重の筆によく現はれてゐる空気が、一面に渡船場を包んで、言い知れぬ情趣」を感じるが、北尾は「何だか、古臭い、汚いところ

ね」と言う。語り手は「恋に燃えてゐる乙女の胸には、そんな懐古の情趣が浮ばなかつた」と説明するが、果たしてそうであろうか。北尾が春太郎の芸術の理解者たり得るというのは、春太郎の過大評価であり、恋心が見せる幻想にも思える。さらに、春太郎は自分が北尾に執着するのは、亡くなったお梅に取り憑かれているからではないかと考える。「生活と芸術に対する了解」も、「お梅の亡霊」も、妻以外の女性に惹かれる自分を肯定したい春太郎の自己弁護ではなかったか。

春太郎の思考は、いつも自分本位である。春太郎は、いい詩ができるかもしれない、絵も描けるかもしれないと妻を説得して、森の家に移り住んだが、結局、絵筆を取ることはなかった。寂しい森の家に幼い娘を独り残して、北尾との密会に出かける。第三子が生まれても「自分とは関係のないものゝやうな気がして」名前をつけるのを先延ばし、届出の期限が過ぎてしまう。産後で窶れた妻を労ろうともしない。最後には妻子を棄てて、北尾のもとへ走る。

森の家に引っ越したことで、不安な夜を過ごさねばならず、夫婦は精神的に追い詰められていく。様々なトラブルに見舞われ、夫婦の間もぎくしゃくし始める。もともと価値観の異なる夫婦ではあった。理想を追い求める夫と現実を生きる妻の不調和は確かにある。しかし、家庭を崩壊させたのは、不倫の恋に走った春太郎である。息子の常夏が病気になり、わが子を案じる夫婦の気持ちは一つになりかけたが、北尾の登場で夫の気持ちは妻子から離れてしまう。「森の家」には、夫婦の価値観の相違による不協和音と、夫の身勝手による家庭の悲劇が描かれている。

上司小剣は「森の家」が発表されるのが「婦人公論」であることを意識して、このようなテーマを選んだのだろう。森の家の状況は深刻だが、作品は陰鬱な感じはない。犬のいたずらも、息子の病気も、北尾への恋慕も、春太郎が何でも怪異のせいにしてしまうところに上司小剣らしいユーモアがある。「森の家」には教訓的なところはないが、春太郎が「良妻賢母」ではなく、芸術を尊重し、自分の「内面生活」を理解してくれる女性を求めるあたりに、新しいタイプの女性への志向が窺える。しかし、その北尾も春太郎の思うような理想の女性ではなさそうで、春太郎は自分の作った像にとらわれていることがわかる。そこに皮肉がある。

三

信州大学所蔵石井鶴三関連資料には、上司小剣が石井鶴三に「森の家」の第三回（「婦人公論」第4巻8号、大正8年8月1日）と第五回（「婦人公論」第4巻10号、大正8年10月1日）の「画ぐみ」を知らせた書簡がある。[12] 次に紹介するのも「森の家」の挿絵に関する書簡である。

石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号［雑2―130］）

いつも平凡な画ぐみになりますけど、

病院の一室で、（洋室）ベッドに寐てゐ
る男の子（常夏といふ、四歳）の枕頭で、看護
婦（十八九ぐらゐ、京都生れの可なり美人）
が飛行機の手遊品（おもちゃ）を持つて、病人を遊ばせ
てゐる。外科患者で、氷嚢などはありません。

看護婦は赤十字に就き　［図］　こんな白い帽
子に十の徽章があります。
右よろしくお願ひ申し上げます。

十月三十一日

森ヶ崎にて
上司生

石井鶴三様

便箋一枚のみで、封筒はない。便箋には「十ノ廿松屋製」の二〇×二〇字の原稿用紙を使用している。この手紙には「十月三十一日」とあるだけで、何年かは記されていない。しかし、大正八年十月三十一日に書かれた手紙だと断定できる。なぜなら、その内容から大正八年十二月一日発行の「婦人公論」（第4巻12号）に掲載された「森の家」第七回の挿絵に関する指示だと思われるからだ。

「森の家」第七回の二十二章には、次のようにある。

大人の寝台へ、棄てられたやうにして寝かされた常夏は、蒼白い顔を仰向けにして、父の顔を見るとニヤリ笑つた。枕頭には色の白い円顔の看護婦が、飛行機の手遊品を持つて、病児を遊ばせてゐた。純白の看護服と白さを競ふやうな頸筋に、すつきりと衿足が通つて、島田でも結はせたらさこそと思はれた。

この場面は、上司小剣が指示した「画ぐみ」と合致している。「色の白い円顔の看護婦」は北尾である。「森の家」第七回の二十二章は、北尾が初めて登場し、春太郎が北尾に興味を持つ大事な場面なのである。

ところが、大正八年十二月一日発行の「婦人公論」（第4巻12号）に掲載された「森の家」第七回には挿絵がない。上司小剣は「森の家」第七回にも挿絵を描いてもらうために、石井鶴三に「画ぐみ」を送っていた。にもかかわらず、挿絵が掲載されなかったのはなぜか。石井鶴三は挿絵を描かなかったのだろうか。それとも、「婦人公論」の編集や印刷の段階で手違いでもあったのだろうか。

「婦人公論」は、大正五年一月一日に中央公論社が創刊した総合雑誌である。その二年半ほど前、すなわち大正二年七月十五日発行の「中央公論」夏期増刊号（第28年9号）で、当時の女性の解放と自我の確立を求める時代の動きと、青鞜社の運動に刺激されて、「婦人問題」を特集した。企画の発案者は、滝田樗陰のもとで「中央公論」の編集にあたっていた嶋中雄作である。かねてより婦人問題に関心を持っていた嶋中雄作はこの「婦人問題特集号」の成功に自信を得て、社長の浅田駒之助に新しい女性雑誌の創刊を進言し、「婦人公論」が誕生した。[13] 嶋中雄作は「婦人公論」の主幹となり、編集の全権を委ねられた。

野上彌生子は「嶋中さんの思ひ出」（『中央公論七十年史』昭和30年11月1日、中央公論社）で、「嶋中さんの婦人問題に対する熱意と興味は、まぎれなく本気なものであつたと思ふ」「『中央公論』を主宰するやうになつたあとでも、嶋中さんの偏愛は『婦人公論』にあつたやうに感じられた」と回想し、「婦人公論」に対する嶋中雄作の並々ならぬ思い入れについて語っている。

野上彌生子の言葉を借りれば、「婦人公論」は「服装、料理、化粧、流行などの女らしい趣味をねらつたもの」ではなく、「政治、経済、

社会、芸術、文化の各方面にわたつて欠けてゐる知識を充たし」、女性を「ゆたかな成長」に導く「堅い婦人雑誌」であった。[14]

『婦人公論の五十年』（昭和40年10月18日、中央公論社）によると、特に「最初の一年は、難解な文章でつづられ、啓蒙的ではあるが何となくぎこちなく、女性の好みにはまだ遠い感じであった」「編集の体裁は、『中央公論』にならって、巻頭第一頁に公論欄、つづいて説苑欄と、いかにも高級知識婦人を狙っての高踏的な装いであった」とある。

例えば、大正五年一月一日発行の創刊号（第1年1号）の内容は、次のようである。

蘭（表紙）　長原孝太郎
かるたの後（十一色刷オフセット口絵）　鏑木清方
歌留多遊び（コロタイプ口絵）　宮川一笑
▼公論
現代婦人の行くべき道　安部磯雄
婦人運動と日本の女　相馬御風
現今女学生気質　宮田修
『嫉妬』の心理学的研究（一）　髙島平三郎
大正新女大学　三宅雪嶺
日本女子の結婚適齢　下田次郎・永井潜・田村俊子・髙島米峰・澤田順次郎・与謝野晶子・永井柳太郎・上司小剣・寺田勇吉・杉村楚人冠・正宗白鳥・三輪田元道・佐藤得齋・岩野清子
▼説苑
夫婦和合家列伝　鈴木秋風
妖怪変化夜話（第一回）　井上圓了
不良少年を産んだ家庭　阪口鎮雄
石井外相夫人訪問記　一婦人記者
薄命に泣いて居る女　松崎天民
支那の貞節　澁川玄耳
女子容色美発揮術（顔容と髪の結ひ方）　伊賀とら
女子職業調べ―電話交換手―　一記者
最近流行界の趨勢　むらさき
《小説と脚本》
長篇小説　情炎（深水画）　長田幹彦
短篇小説　艶子の家出（深水画）　田村俊子
歴史小説　舞殿（英朋画）　笹川臨風
短篇小説　平民の家（英朋画）　柳川春葉
家庭笑劇　父様ごっこ（一平画）　巌谷小波
長篇小説　若妻（輝方画）　小栗風葉

記事はいずれも女性に関するテーマや女性が関心を持ちそうな話題を取り上げている。しかし、創刊号から「難解な文章でつづられ、啓蒙的ではあるが何となくぎこちなく、女性の好みにはまだ遠い感じ」は否めない。

『婦人公論の五十年』では、「口絵は十一色刷りオフセットで、「歌留多会の夜」という大丸まげの若妻姿（鏑木清方画）、いま一枚は、これも「歌留多遊び」と題されたコロタイプ版、この二枚が、辛うじて女性のための雑誌、という色彩を与えているにすぎない」と指摘されている。「婦人公論」創刊号に掲載された絵は口絵だけではない。小説と脚本にもすべて挿絵が入っている。しかし、「女性の

ための雑誌」だからといって、女性の興味を引くためだけに、口絵や挿絵が入れられたのではないだろう。

大正六年一月一日発行の第二年一号からは、口絵の新企画が始まる。その「口絵の改良」が次である。

今年から口絵として毎号本誌に続載する「現代女風俗」は我国画界の泰斗石井柏亭、山村耕花両氏が隔月、千姿万様の現代婦人の風俗を描いたものでありまして、後に至つてこれを纏めて画帖としたならば後代に記念とするに足るべき立派な風俗画帖が得られるでせう。これも有り来りの婦人雑誌の口絵から特に本誌の新味を出したもので皆様の御珍重を得たいと希望するものであります。

「現代女風俗　その一」は、石井柏亭が描いている。さらに、同号から「挿画」が掲載されるようになる。同号に掲載された「挿画」は、山村耕花「新春」、正宗得三郎「おしげの顔」、山下新太郎「弾き初め」、池田輝方「年始」、名取春仙「初已詣」、石井柏亭「年賀状」の六点である。これらの「挿画」は小説の挿絵ではない。季節は意識されているが、それぞれが独立した作品である。このような口絵の企画や「挿画」の有り様を見ても、「婦人公論」の口絵や挿絵は女性の芸術的素養を高める目的で掲載されていたと思われるのである。

小説の挿絵については、大正五年二月一日発行の第一年二号以降の短篇小説には挿絵が掲載されていないが、連載長篇小説には挿絵が入る。上司小剣の「森の家」も連載長篇小説であったから、「婦人公論」の嶋中雄作が推薦して、石井鶴三が挿絵を描くことになったのである。しかし、大正八年十二月一日発行の「婦人公論」（第4年12号）から「森の家」に挿絵はない。前述したように、上司小剣は第四年十二号に発表した「森の家」第七回の「画ぐみ」も考えて、石井鶴三に連絡していた。にもかかわらず、挿絵は掲載されなかったのである。

「森の家」第七回が発表された第四年十二号には、「小説欄の改造」と題し、次の文章が掲載されている。

これまでとても芸術的作品を提供することに苦心して来た本誌の本説は、新年以後更に一層の努力を此方面に致して、従来の長篇小説三篇を二篇とし、此に代ふるに外国文学の名篇一篇と、現文壇との生きた接触を保たしめる為に新進作家の短篇小説一篇と、更に高尚なる趣味の涵養を図る目的を以て芸術的新童話（お伽噺）の創作一篇と、都合五篇を毎号掲載して、益々愛読者諸姉の眷顧に酬いようと思ふ。

大正九年一月一日発行の第五年一号から「小説欄の改造」が行われたのである。第五年一号には「目下連載好評ある二長篇小説」として上司小剣「森の家」と久米正雄「空華」、「新進作家」の作品として菊池寛「慎しき結婚」、「外国文学紹介の手初め」としてステファン・ゼロムスキイ作・木村毅訳「黄昏」、「芸術的新童話の第一篇」として秋田雨雀「日を見るまで」が掲載されている。

この「小説欄の改造」に伴い、第四年十二号から小説の挿絵が掲載されなくなったのではないか。第四年十二号に掲載された小説は楠山正雄「浮舟物語」、上司小剣「森の家」、久米正雄の「空華」の三篇であった。「森の家」と同じ時期に連載された「浮舟物語」もそ

れまでは挿絵が掲載されていたが、「森の家」と同様に第四年十二号には挿絵がない。大正八年十月一日発行の第四年十号から連載が開始された久米正雄の「空華」には、初めから挿絵がなかった。

『中央公論社の八十年』（昭和40年10月18日、中央公論社）によると、「大正八年は〈中略〉嶋中主幹が伊豆湯河原で半沢成二[15]と『婦人公論』のすすむべき方向について話し合った年である」。

さらに、「これまで『婦人公論』のプランは『中央公論』の滝田樗陰の場合と同様、全部嶋中雄作が自分できめて、半沢と波多野[16]はただ寄稿依頼の使歩きや校正を割り当てられるだけであったが、この年あたりから毎月編集会議がもたれるようになり、『婦人公論』の内容にも多分の変化が見られた」という。

編集会議による「多分の変化」の一つが「小説欄の改造」だったのではないか。小説に挿絵が掲載されなくなったのも、その余波だと考えられる。ただ、「小説欄の改造」後も「新童話」には童話の内容に即した挿絵が掲載されている。童話にはやはり挿絵があった方がよいと判断したのだろう。一方で、小説は絵と切り離し、絵は口絵や「挿画」として掲載する、つまり、それぞれを独立した「芸術的作品」として「提供する」ことにしたのではないか。

四

石井鶴三は、大正七年三月一日発行の第三年三号に発表した「産婦」をはじめ、大正期の「婦人公論」に四点の口絵と六十点の「挿画」を描いている。[17] 特に「挿画」は大正七年から毎月のように掲載されているので、この時期の石井鶴三の主要な仕事の一つだったのであろう。

石井鶴三は「さしえ画家として」（「中央美術」第9巻7号、大正12年7月）の中で、「タブローを作る事は真面目な仕事でさしえなど描くのは不真面目な仕事だというような事がいわれ易い」とし、次のように述べている。

> 展覧会や美術館を見に行く人、自宅の壁に絵を掛けて見る人は少数に限られております。然るに新聞雑誌その他書物を手にする人は、ずっと広い範囲に亘ります。さしえはこの最も多数の人に見られるのです。それら多数の人は僅かにさしえによって絵を見る喜びを受けているのです。考えて見ると一枚のさしえを描く事は、一枚のタブローを作るよりも寧ろ重大な責任のある仕事だともいえます。

さらに、「読物が文学の作品として尊敬されると同じく、さしえが美術の作品として同じ価値を認められるのが当然です」と主張している。[18] 石井鶴三は「婦人公論」の口絵や「挿画」についても同様に考え、「一枚のタブローを作るよりも寧ろ重大な責任」を背負って、「真面目」に制作に取り組んでいたに違いない。そのような姿勢が嶋中雄作の信頼を得るところとなり、「上司氏に知られ愛されて、氏の小説に挿画をたのまれることになった」のである。[19]

注

(1) 石井鶴三「挿画の思い出」（「日本文学の歴史　月報⑫」昭和43年4月、角川書店）。

石井鶴三は、上司小剣の「花道」より前に、田村松魚の「歩んできた道」（「やまと新聞」大正7年4月12日～7月5日）に挿絵を描いているが、この時は兄の石井柏亭と交代で担当した。

(2) 大正九年四月十二日、七月十二日、七月二十四日は挿絵が掲載されていない。

(3) 発行日は奥付の記述に従ったが、明らかな誤植である。

(4) 新聞連載時の挿絵を使ったと思われるものもあるが、単行本用にサイズを変えて、新たに描き直したものが多い。

(5) 石井鶴三「挿画の思い出」（前掲）。

(6) 石井鶴三「挿画の思い出」（前掲）。

(7) 上司小剣「石井鶴三さんを語る」（「書窓」第2巻3号、昭和10年12月18日）。

(8) 石井鶴三「挿画の思い出」（前掲）。

(9) 上司小剣と石井鶴三の会見は、大正八年五月二十七日に行なわれたようである。拙稿「上司小剣「森の家」「花道」の挿絵と装幀に関して―石井鶴三宛上司小剣書簡から―」（「信州大学附属図書館研究」第1号、平成24年3月31日）参照。

(10) 「森の家」以前に、上司小剣が「婦人公論」に発表した小説は、「赤い帯」（第1年4号、大正5年4月1日）、「紅白の真綿」（第1年第11号、大正5年11月1日）、「新壺坂寺」（第2年10号、大正6年10月1日）、「お小夜の手紙」（第3年1号、大正7年1月1日）、「赤い鼻緒の駒下駄」（第3年4号、大正7年4月1日）、「お種の心」（第3年10号、大正7年10月1日）、情話「お玉の恋と死」（第3年11月、大正7年11月1日）、「娘も憎い」（第4年1号、大正8年1月1日）、「湯屋の娘と画家」（第4年4号、大正8年4月1日）である。なお、半澤成二は『大正の雑誌記者―一婦人公論記者の回想』（昭和61年2月20日、中央公論社）の中で、大正八年新年号の小説欄を読んだ感想を「短篇では、上司小剣の「娘も憎い」はユーモアがあってこれまた秀作」と記している。

(11) 上司小剣は「森の家」を完成させてから「婦人公論」に発表したのではなく、連載と並行しながら執筆を進めていたのである。

(12) 拙稿「上司小剣「森の家」「花道」の挿絵と装幀に関して―石井鶴三宛上司小剣書簡から―」（前掲）参照。

(13) 「婦人公論」の創刊の経緯について、嶋中雄作は『回顧五十年』（昭和10年、中央公論社）の中で、次のように述べている。

その頃澎湃として、劇に評論に一世を風靡したのは個人主義的思想に伴う婦人の自覚と解放であった。私は滝田氏（引用者注・滝田樗陰）に献言して、『中央公論』夏季臨時増刊を発行せしめ、これを「婦人問題号」と名付けたこともあった。

その臨時号が比較的に評判が好かったからというのでもないが、時代の動きや青鞜社の運動などに刺激されて、私は新しい婦人雑誌の創刊を麻田社長（引用者注・麻田駒之助）に進言し、その容れらるるところとなって、ここに『婦人公論』が生まれた。

引用は『出版人の遺文　中央公論社　嶋中雄作』（昭和43年6月1日、栗田書店）によった。

青鞜社は、平塚らいてうが首唱して結成した文学集団である。その機関誌「青鞜」は明治四十四年九月に創刊し、大正五年二月まで計五十二冊発行された。

(14) 野上彌生子は「嶋中さんの思ひ出」（『中央公論七十年史』昭和30年11月1日、中央公論社）で、「婦人公論」について次のように述べている。

ヨーロッパでも国によつて事情を異にすると思ふが、特に婦人を目標にする雑誌としては服装、料理、化粧、流行などの女らしい趣味をねらつたものはあつても、日本のいはゆる堅い婦人雑誌と称する型のものは一般には見あたらないやうに聞いてゐる。しかし男女の知的水準のひらきの激しい、さうしてまたなにかを学び取らうとしても婦人にはその機会がたやすく恵まれない状態の中では、綜合雑誌のいはばジュニア・コースといつたかたちでの婦人雑誌の存在は非常に重要であり、それによ

つて婦人は政治、経済、社会、芸術、文化の各方面にわたつて欠けてゐる知識を充たし、ゆたかな成長に導かれる。その意味に於いて「婦人公論」を通じての嶋中さんと日本の若い娘たちとの繋がりは大正以来の婦人文化史の上に大きな意義をもつものだといつてよいであらう。

(15) 半澤成二（一八九六〜一九七四）は、大正十二年「郊外の貧しき街の人々」で作家デビューし、大正十三年「文芸時代」の同人になる。筆名は諏訪三郎。大正七年、中央公論社に入社、「中央公論」記者から転じ、十四年まで七年間「婦人公論」記者をしていた。

半澤成二は『大正の雑誌記者――一婦人公論記者の回想』（前掲）の中で、嶋中雄作は「思潮的論説欄にはひどくきびしかった」と回想している。嶋中雄作に大正八年一月一日発行の「婦人公論」（第4年1号）の感想を求められて、作家志望だった半澤が小説の感想を述べようとすると、「小説欄など、どうでもよい」と言われたという。嶋中雄作が実際に「小説欄など、どうでもよい」と考えていたとは思われないが、「婦人公論」において「思潮的論説欄」を重視していたことは確かであろう。

(16) 波多野秋子（一八九四〜一九二三）は、十八歳で波多野烏峯と結婚。大正七年に高嶋米峰の紹介で「婦人公論」記者として入社した。大正十二年、軽井沢で有島武郎と心中を遂げた。

(17) 石井鶴三が大正期に「婦人公論」に発表した口絵は「支那の玩具」（第5年10号、大正9年10月1日）、＊「婦人労働者（現代職業婦人の五）」（第6年5号、大正10年5月1日）、＊「こども十二態（8）」（第8年8号、大正12年8月1日）、＊「穂高山」（第9年12号、大正13年12月1日）である。

また、「挿画」は「産婦」（第3年3号、大正7年3月1日）、「泣く児」（第3年4号、大正7年4月1日）、「髪を結ふ女」（第3年6号、大正7年6月1日）、「婦人登山者」（第3年8号、大正7年8月1日）、「月」（第3年9号、大正7年9月1日）、「隠す人と隠さない人」（第3年10号、大正7年10月1日）、「雛妓」（第3年12号、大正7年12月1日）、「追羽子」（第4年1号、大正8年1月1日）、「お手玉を取る少女」（第4年3号、大正8年3月1日）、「化粧」（第4年4号、大正8年4月1日）、「踊子」（第4年5号、大正8年5月1日）、「糸を捲く」（第4年7号、大正8年7月1日）、「朝」（第4年8号、大正8年8月1日）、「丸太町橋」（第4年10号、大正8年10月1日）、「秋晴」（第4年11号、大正8年11月1日）、「羽子板店」（第4年12号、大正8年12月1日）、「田舎の正月」（第5年1号、大正9年1月1日）、「雪の朝」（第5年2号、大正9年2月1日）、「マスク」（第5年3号、大正9年3月1日）、「長閑」（第5年4号、大正9年4月1日）、「野路と小雨」（第5年5号、大正9年5月1日）、「帰路」（第5年6号、大正9年6月1日）、「お稽古」（第5年8号、大正9年8月1日）、「雷鳥」（第5年9号、大正9年9月1日）、「阿蘇の噴煙を望む」（第5年10号、大正9年10月1日）、「耕作」（第5年11号、大正9年11月1日）、＊「凧」（第6年1号、大正10年1月1日）、「女絵師」（第6年2号、大正10年2月1日）、「渡し」「嬰児」（第6年4号、大正10年4月1日）、＊「旅疲れ」（第6年7号、大正10年7月1日）、＊「池」（第6年11号、大正10年10月1日）、＊「農婦」（第6年13号、大正10年12月1日）、「若水」（第7年1号、大正11年1月1日）、「綱渡り」（第7年3号、大正11年3月1日）、＊「車中所見」（第7巻4号、大正11年4月1日）、＊「面会」（第7年6号、大正11年6月1日）、＊「水遊び」（第7年9号、大正11年8月1日）、＊「夕」（第7年10号、大正11年9月1日）、＊「山の温泉場」（第7年12号、大正11年11月1日）、＊「こども」（第7年13号、大正11年12月1日）、＊「湖上の雲」（第8年1号、大正12年1月1日）、「雪たるま」（第8年2号、大正12年2月1日）、＊「摘み草」（第8年3号、大正12年3月1日）、＊「春の雨」（第8年4号、大正12年4月1日）、＊「山路」（第8年5号、大正12年5月1日）、＊「郊外初夏」（第8年7号、大正12年7月1日）、＊「向日葵の下」（第8年8号、大正12年8月1日）、「裏庭」（第8年11号、大正12年10月1日）、＊「災後の浅草仲店」（第8年12号、大正12年11月1日）、＊「外出」（第9年1号、大正13年1月1日）、＊「ぶらんこ」（第9年3号、大正13年3月1日）、＊「社頭」（第9年4号、大正13年4月1日）、＊「雨」（第9年6号、大正13年6月1日）、＊

「麦刈」（第9年7号、大正13年7月1日）、＊「ソーダ水」（第9年9号、大正13年8月1日）、＊「鉛筆」（第9年13号、大正13年12月1日）、＊「木兎」（第10年2号、大正14年2月1日）、＊「少女」（第10年4号、大正14年4月1日）、「晩春」（第10年6号、大正14年6月1日）、＊「山村の朝」（第10年7号、大正14年7月1日）である。

＊を付した作品は『石井鶴三全集　第二巻』（昭和61年7月18日、形象社）、『石井鶴三全集 第三巻』（昭和61年3月17日、形象社）に収録されている。

(18) 引用は『石井鶴三全集　第二巻』（前掲）によった。

(19) (8)と同じ。

参考文献

・『中央公論社七十年史』昭和30年11月1日、中央公論社
・『中央公論社の八十年』昭和40年10月18日、中央公論社
・『婦人公論の五十年』昭和40年10月18日、中央公論社
・栗田確也編『出版人の遺文　中央公論社　嶋中雄作』昭和43年6月1日、栗田書店
・日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典　第五巻』昭和52年11月18日、講談社
・半澤成二『大正の雑誌記者　一婦人公論記者の回想』昭和61年2月20日、中央公論社
・『石井鶴三全集　第一巻』昭和63年12月21日、形象社
・『石井鶴三全集　第二巻』昭和61年7月18日、形象社
・『石井鶴三全集　第三巻』昭和61年3月17日、形象社
・『石井鶴三全集　別巻Ⅰ』平成元年3月29日、形象社

＊本稿は科学研究費補助金（基盤研究C・課題番号 16K02420）による研究成果の一部である。